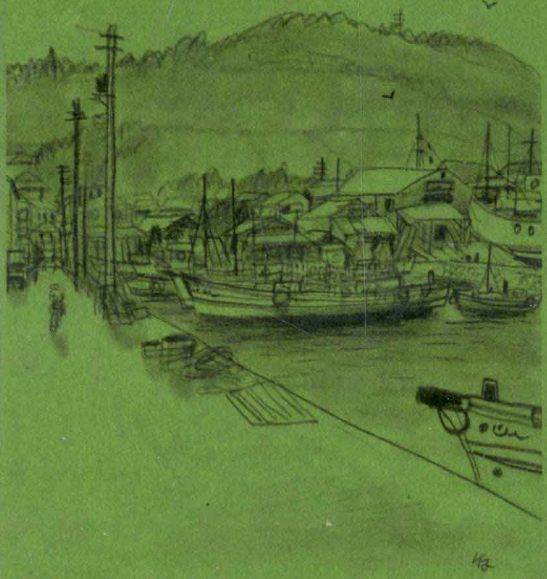

五木寛之

青春の門

筑豊篇 下

講談社

青春の門　第一部　筑豊篇　下

著　者　五木寛之

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京　三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

第一刷発行　昭和四十五年十一月三十日
第二十二刷発行　昭和四十九年五月二十日

©五木寛之　昭和四十五年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価は箱に表示してあります。　(文2)　Printed in Japan

目次

まひるの爆走　5
女の匂い　18
黒い犬の影に　31
男と女の間に　43
十年先の約束　55
義理の世界　65
川筋喧嘩作法　77
春の病葉　111
熱く溢れるもの　123

女を売る町　135
落日の前に　161
幼い初夜　173
犯す男たち　197
人と別れるとき　222
独りだけの夜明け　234
十八歳の出発　248

装幀　村山豊夫
題字　菅　甘林
表紙絵　さしえ　風間　完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の門

筑豊篇　下

まひるの爆走

金朱烈の事件は、裁判が長びくままに、いつの間にか世間から忘れられて行こうとしていた。信介は自分では直接なにひとつできないままに、朱烈の無罪を信じて、いつかはきっと彼が帰ってくると思っていた。

タエの病気が少しずつ快方にむかいはじめたのは、彼女が郊外の療養所に入院してから二年目の春である。

それは、信介がすでに中学三年になり、高校への進学を一年後にひかえて受験勉強にとりかかろうとしている時期だった。

信介は自分で、自分のことを頭のいい人間だとは思っていなかった。体力と運動神経には自信があったが、学科、ことに理数科系の勉強は苦手だった。授業の中でも、彼がどうやら興味を持つことができたのは、国語と社会科である。信介は本を読むことが嫌いではなかったし、また歴史や人文地理

には彼の素朴な想像力を刺激するものがあって、それを勉強することが苦痛ではなかった。
信介は、途中で他の中学から転校してきたせいもあって、飯塚の中学では、それほど多くの友達を持っていなかった。それはひとつには信介が塙組の組長、塙竜五郎の家から通学していたこともあったかもしれない。
クラスの少年たちは、信介についてさまざまな噂を立て、彼は一種えたいのしれない存在として敬遠されていたのである。
「あいつのとこのおっ母しゃんな肺病げな」
と、少年たちは囁きあっていた。
「あんまり仲良うすると、肺病ばうつさるるぞ」
信介の父親が、かつては筑豊で〈のぼり蜘蛛の重〉と呼ばれた伝説中の人物であることを知っている連中もいた。彼らはそのことを中学の用務員である勇吉老人から聞かされたものらしい。その老人は、かつて飯塚でもかなり鳴らした外題人だったという。
「警察に追われてダイナマイトば投げたばってん、逃げきれんじゃったと」
「ちがう。あいつの親父は、軍隊と撃ちおうて殺されたち話じゃったぞ」
「その頃のやくざの仲間が塙組の親分の塙竜五郎げな」
「それで塙組の事務所に住んどるんか」
「たぶんそげなことじゃろ」
信介は、そんな少年たちのひそひそ話を、黙って聞いていた。面と向かって彼にいろいろたずねる者

のいないことが、彼を暗い気持にさせていた。もし誰かが信介に彼の父親のことをきいたなら、彼は胸を張って〈のぼり蜘蛛の重〉こと伊吹重蔵の生涯について自信をもって喋っただろう。彼は今も父親のことを誇りに思っていたし、母親の病気のことも、いま世話になっている塙竜五郎についても、少しも恥ずかしいとは感じていなかったからである。

しかし、そんな噂の中で、他校からの転入生である信介が孤立していたことは事実だった。彼はクラブ活動にも参加していなかったし、校内にいくつかある不良グループにも関係がなかった。授業が終ると、まっすぐ塙組の事務所に帰り、独りで土蔵の中の古本を引っぱり出して読みふけったり、組の若い者の間にまじって、雑談をしたり、掃除をしたりして過していたのである。

田川にいる牧織江とも、次第に会う機会がなくなり、いつの間にか織江の顔を思い出すことも少なくなって行った。その代りに、新しく信介の気持の中に、異性としてある印象をあたえていたのは、その年の新学期から中学に赴任してきた梓旗江という音楽の女教師だった。

梓先生は広島の出身で、東京の音楽大学を卒業してすぐに信介らの中学にやってきた女教師である。彼女は　中学生の目には、ひとく新鮮で　そして時には異様な感じにさえうつるような、型破りの教師だった。

梓先生は、背が高く、立派な胸と、まるく形のいい腰をしていた。ぴっちりしたスウェーターに包まれた乳房は、信介たち思春期にさしかかった少年の目には、余りにもまぶしいほど弾力にみちて突き出していたし、その短めのスカートからのびているやや太目の白い脚は、歩くたびにふくらはぎのあたりがすれあって、キュッキュッというかすかな音を立てるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

髪は、染めているかと思われるほど赤っぽい色だった。そして広い大きな口と、黒く良く光る目と、少し上向きに反った可愛い鼻とが、先生の表情に明るい生気をあたえていた。化粧も思い切り濃く、服装も大胆なものだった。

「あのおなご先生はパンパンのごとあるね」

と、言う生徒もあり、いや、アメリカ人の女のようだという意見もあった。

「あげな化けもんが中学の先生になるとは呆れたことばい。戦争に敗けたとじゃけん、仕方もなかばってん、昔じゃったら非国民ち言われて髪ば切らるるところじゃ」

用務員の勇吉老人は、顔をしゃんとあげて足早に廊下を歩いて行く梓先生のうしろ姿を眺めながら、吐き出すように呟くのだった。

だが、信介はそんな梓先生に強い関心を抱いていた。彼には、非難と好奇の視線に囲まれながら、いっこうにそれを気にせず、のびのびと自由に振舞っている女教師の闊達さが、とても素晴らしいものに思えていたのである。

彼は一度なんとかして梓先生と個人的に口をきいてみたいと考えていた。そして、できることなら彼女と親しくなり、彼の全く知らない東京の話や、学生生活や、音楽のことなど、いろいろと聞けたらどんなに幸せだろうと思っていた。だが、信介には自分の方から彼女に話しかけたり、親しくなったりすることはできそうにもなかったし、梓先生が指導しているコーラス部に入部する勇気もなかった。そんな信介にとっては、登校の際にちょうど梓先生が学校へ向かう時間を予測して、途中で偶然のように顔を合わせ、照れくさそうに、おはようございます、と挨拶するのが唯一の充実した瞬間だ

ったのである。
だが、信介のそんな願いが、思いがけずにかなう日が突然やってきたのだった。

五月はじめの日曜日の午後だった。
信介は塙竜五郎から払いさげてもらった中古のオートバイに乗って、飯塚の街から少し離れた炭鉱の事務所へ出かけた帰りだった。運送した荷物のことで、呼び出しがかかっていたのである。
ちょうど正午すぎで、肌がじっとりと汗ばむような良く晴れた日だった。信介が走っていると、製材所の前に、横倒しになった自転車があり、その横に腰に手を当てて困ったように突っ立っているムギワラ帽子の若い女が見えた。
信介はその女を見た瞬間、すぐに梓先生だと気づいた。その日は紺のスカートに白いブラウスという、おとなしい恰好だったが、信介には一瞬のうちにそれが梓先生だとわかったのである。彼女以外に、あんなに見事な胸をした若い娘がいるはずはないのだ。
信介はオートバイを徐行させて、その横を通りすぎた。そして、いったんブレーキをかけてオートバイを止めると、ふり返って梓先生を眺めた。
梓先生は信介を眺めて、ああ、と軽い声をあげ、ぱっと花が開くような明るい笑顔をつくった。
「ちょっと、きみ」
と、彼女は大きな声で信介に呼びかけ、自転車をおいたまま、スカートを蹴たてるような歩き方で彼の方に近づいてきた。

「どげんしたとですか、先生」
「きみのこと知ってるわ。毎朝、登校するとき顔を合わせる生徒ね。なんて名前だっけ」
「伊吹信介」
「伊吹くんか。きみ、自転車のこと、わかる？」
「うん」
「じゃあ、ちょっと見てよ。走ってたらいきなり転んじゃったの。どうなったのかしら」
「けがはなかったですか」
「そんなヤワな肉体じゃないわよ」
梓先生の発した、肉体、という言葉が、ひどくなまなましく刺激的な響きで、信介は不意に赤くなってオートバイから降りた。そして製材所の壁に立てかけると、倒れた自転車を引きおこして、点検した。
「はあ、これは駄目です」
「どうなってるの？」
「チェーンが切れてギアに巻きついとるとです。このままじゃ走れんね」
「困ったなあ。ついてない時はこんなもんだわ」
梓先生は舌打ちして、髪をひとふりすると大きなため息をついた。ブラウスの最初のボタンをはずしているので、その間から光沢のある盛り上りの裾野が陽に光って見え、信介はどきどきしてひどく口の中が乾いてきた。

「どうしよう?」
「どこか行かっしゃるとですか」
「うん。博多まで、本を買いにね」
「自転車で?」
「そうよ。前にも往復したことあるもの。平気よ」
「ちょっと無理じゃなかですかね」
「馬鹿にしないで。これだって高校の時は陸上の国体選手だったんだから」
「ふうん」
信介は梓先生のやや汗ばんだ額を眺めながら、この人のために何かしてやりたい、という強い衝動に駆られていた。
「伊吹くん――」
と、不意に梓先生が言った。
「なんですか」
「きみ、今日は時間あるの」
「うん」
「あたしをそのオートバイに乗っけて走れるかしら」
「走れるとも」
「重いわよ」

「大丈夫です。いつも木炭三俵積んで走っとるもん」
梓先生は上目づかいに信介をいたずらっぽい目で見て、
「じゃあ、あたしを乗せて博多まで運んでよ。その代り、むこうでうんとごちそうしてあげるから」
「はあ」
信介はやや目を細めて梓先生の体を眺めた。一メートル六十センチはあるかもしれない。男ほどではないが、体重だって信介よりはあるだろう。果してこの先生をのせて博多まで走れるだろうか。
「八木山峠の登りはちょっと辛いかもしれんです」
「いいわよ。登りはどうせ歩くつもりだったんだから」
「揺れますよ」
「平気よ、そんなの」
信介は前に菅野長太を乗せて走ったことを思い出した。中学三年になった信介は、最近急に身長がのび、体重もふえて、ちょっと見ると高校二年くらいの体格である。梓先生をうしろに乗せて走ることは、不可能ではない。
「この自転車、どうします」
「ここの製材所にでもあずけるわ」
「じゃあ、いいです」
「ありがとう、伊吹くん」
梓先生はぽんと片手で信介の肩を親しげに叩くと、自転車を引きおこして、製材所の方へ押して行

った。

〈大丈夫だろうか？〉

信介は不安になって考えた。乗せて走ることは平気だ。しかし、相手が悪かった。これまで何とかして言葉を交したいと思っていた憧れの対象だけに、突然降ってわいたチャンスに彼の心臓は、すでに常態ではなかった。

「おまちどおさま」

梓先生がもどってきた。そして信介のオートバイのそばへくると、目を見張って、

「伊吹くん、なかなかやるわね。このオートバイ、凄いじゃない」

「割合に馬力があるんですよ」

信介は誇らしい気持で一杯になって答えた。そのオートバイは塙竜五郎からもらったやつを、長太と春男の協力で完全に整備した代物である。古くはあったが、なかなかの働きを示した。ふだんは長太と春男と信介が交互に使っている。長太は一度、そのオートバイに日本刀をくくりつけて喧嘩の仲裁に飛んで行ったこともある。

「面白いなあ。あたし、前から一度オートバイに乗ってみたいと思ってたのよ」

梓先生が言った。

「どう乗ればいいの？」

「ちょっと待ってください」

信介は急に真面目な顔になって、ハンドルを握ると、体重を乗せてエンジンをスタートさせた。一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com